

昔むかし、七つの国を七回越えたその向こうに、ひとりの王さまがいました。王さまには、すばらしく美しいお妃と、かわいらしいお姫さまがありました。王さまとお妃はお姫さまをたいそうかわいがっていました。

やがて、お姫さまは成長して、お妃と同じくらいに美しく、かしこい娘になりました。ところが、あるとき、お妃が病気になり、そのまま亡なくなってしまいました。王さまは悲しみのあまり、何も食わず、眠りもせずに、毎日泣いてばかりいました。お姫さまは、いつも明るく、王さまを励はげしました。

ある日、王さまはお姫さまにいいました。

「わしは、二度と結婚しないことを誓う。おまえの母さんのような人に出会うことはないのだから」

お姫さまは、

「お父さまが結婚しないのなら、わたしも結婚しないで、ずっとおそばにいきましょう。お父さまをひとりしておけないもの」といいました。

ある日のこと、お姫さまはお城の庭園を散歩していました。庭園には、世界じゅうのありとあらゆる花が咲き乱れていました。庭園の真ん中に、天までとどくほど高い木がありました。

お姫さまは、

「こんなに美しい庭園があるんだもの。結婚なんてしなくていいわ」とつぶやきました。そのとき、ものすごい大風おおかせが吹いて来て、お姫さまを木のとっぺんへ連れて行ってしまいました。

お姫さまは、夕方になってもお城に帰って来ませんでした。王さまは、お城じゅうを探し、庭園じゅうを探しましたが、見つかりませんでした。そこで、家来に命じて町の通りという通りを探させましたが、それでも見つかりませんでした。王さまは、国じゅうを探させましたが、やっぱり見つかることはできませんでした。

ある晩、王さまは夢を見ました。それは、大風がお姫さまを木のとっぺんにさらって行って、今は、お姫さまは、二十四の頭あたまの竜の館にいる、という夢でした。

あくる朝、王さまは、こんなおふれを出しました。

姫を木のとっぺんの竜の館から連れもどせる勇士がいたら、姫と王国の半分をあたえ、王亡きあとは、王国ぜんぶをあたえよう。

おふれが出るやいなや、たくさんの勇士たちが、王さまのもとにやって来ました。けれども、天までとどく木のとっぺんまで登りきることができる者はいませんでした。みな、木からすべり落ちて、ある者は腕を折り、ある者は足を折り、ある者は首を折りました。王さまは、もう二度と娘には会えないと思って泣き暮らしました。

王さまのお城に、ぶた飼いの少年がいました。ヤーノシュという名前で、毎日、ぶたを森に連れて行くのが仕事でした。

ある日、ヤーノシュは、いつものようにぶたを連れて森に行きました。すると、こぶたがいっぱき近づいて来て、ヤーノシュに話しかけました。

「ヤーノシュ、あんたがお姫さまを連れもどすんだよ」

ヤーノシュはおどろいて、

「何だつて。そんなことできないよ」といいました。すると、こぶたはいいました。

「おいらは、できないことを話してるんじゃないよ。王さまの所に行って、こういうんだ。『わたしに、野牛やぎゅうの皮でサンダルを七足と服を七着こしらえてください。それを身に着けて破れるころ、お姫さまを連れもどつて来ましょう』とね」

それから、こぶたはいいました。

「それから、これもあんたにいつておくよ。木の真ん中まで登ったら、そこから先は細い枝になる。枝は、世界の一、五倍も長いけど、あんたは、その枝の端まで這はつていくんだ。落ちないように気をつけるんだよ。落ちたら骨がこなごなになるからね。端まで行くと葉っぱがついている。それぞれの葉っぱに国がひとつずつおさまるくらいに大きな葉っぱだ。そこまで行き着いたら、お姫さまを見つけることができるよ」

ヤーノシュは、こぶたにお礼をいってお城にもどりました。そして、さっそく王さまのもとに行っていました。

「王さま、もしお許しをいただけるなら、わたしがお姫さまを見つけましょう」

王さまは笑っていました。

「どれほどりっぱな勇士たちでも、登れなかったというのに、おまえのような少年が、どうやって姫を連れもどそうというのだ」

「それは、わたしの考えることです。行かせてください」

「それほどいうのなら、やってみよ」

「では、王さま。野牛の皮でサンダルを七足と服を七着こしらえてください。わたしはそれを身に着けて破れるころ、お姫さまを連れてもどります」

王さまは、

「ヤーノシュ、神のご加護を。娘を連れてもどつて来たら、おまえも幸せになれるぞ」といいました。

ヤーノシュは、登りはじめました。斧を木の幹に打ちこんで登り、斧をぬいてまた上へ上へと打ちこんでいきました。どんどん登つて、とうとう地上からはヤーノシュの姿が見えなくなりました。やがて、細い枝に行きつきました。ヤーノシュは、腹ばいになつて、毛虫のように這つていきました。ようやく大きな葉っぱの所に来ると、ヤーノシュは、

「地上とはお別れだ」とつぶやいて、「ヤッー」と、葉っぱに跳び移りました。

「なんてことだ。ここは、地上と同じみたいだ」

そこには田畑があり、二十階建ての建物のある町もありました。ヤーノシュは、どんどん歩いて行きました。行けども行けども、だれにも会いません。町はとても美しいのに、人の姿はありませんでした。

いきなり、上のほうから声がしました。

「ヤーノシュ、どこへ行くのですか」

見上げると、大きな館のバルコニーにお姫さまがいました。ヤーノシュは、

「お姫さま、あなたを探しているんです。あなたをお城に連れ帰るために」と答えました。お姫さまは、

「夫に見つかつたらあなたは殺されます。私の夫は二十四の頭を持つ竜なのです。今、夫は留守だから、こっそり上がっていらつしやい」といいました。

ヤーノシュは、竜の館に入っていました。お姫さまは、

「もうすぐ夫が帰つて来ます。この洗いおけの下に隠れていなさい」といって、ヤーノシュを洗いおけの下に隠しました。

やがて、ものすごい音がして、竜が帰つて来ました。竜は大声でほえました。

「くさいぞ、くさいぞ。やって来たのは何者だ。よそ者がやって来たのはとちゅうから

分かっていただぞ」

「怒らないでください。わたしがいなくなったのを心配して、うちのぶた飼いが下界から登って来たのです」

「どこにいるんだ。連れて来い」

「連れて来ますけれど、あわれなぶた飼いをいじめないでね。ここで召使いとして働かせましょう」

お姫さまは、洗いおけを持ち上げて、ヤーノシュを出しました。竜は、ヤーノシュをぱくりと飲みこみました。それからはき出し、またぱくりと飲みこみ、はき出しました。三度目に、ぱくりと飲みこんではき出すと、竜はいいました。

「召使いとして働くがいい。おまえに無駄飯むだめしを半分食わせることになるか、それともぜんぶ無駄飯になるか、いずれわかるというものだ」

ヤーノシュと竜は、食べたり飲んだりしてから、厩うまやに行きました。厩にはたくさんの馬がいて、みな太りすぎてよたよたしていました。ただ、一番奥のすみに子馬が一頭いて、立ち上がれないほどやせていました。

「ヤーノシュ、厩をそうじして、馬にえさと水をやるんだ。ただし、一番奥のすみにいる子馬には、ほかの馬と同じえさはやるな。そまつなえさでいい。けっして子馬が欲しがるものをやつてはいけない」

竜はそういつて、出て行きました。

ヤーノシュは、一か月のあいだ、厩で働きました。よく働いたので、すっかり竜に気に入られました。

ある日、竜が狩りに出かけていたとき、ヤーノシュは、小馬にたずねました。

「かわいそうに。どうしてそんなにやせているんだ。立てないのかい」

すると、小馬はいいました。

「あんたはやさしい若者だ。あんたがお姫さまを連れ出すためにやつて来たのは知っている。私のいうことをよくお聞き。お姫さまの所みなもとに行つて、竜の力の源みなもとがどこにあるか、竜から聞き出すようにというんだ」

ヤーノシュは、すぐにお姫さまの所に行つて、

「お姫さま、竜が力の源をどこにたくわえているのか、聞き出してください」といいました。お姫さまは、

「それは難しいことよ。でも、あまい蜜みつのような言葉でさぐり出してみましよう」といいました。

次の日、竜が出かけようとする、お姫さまがいいました。

「ねえ、あなた。きょうは、狩りに行かずに、私といっしょにいてくださいな。私、いつもひとりなんですもの」

「では、おまえのそばにいてやろう」と、竜はいいました。それから、お姫さまは、

「あなたにおたずねしたいことがあるの」といいました。

「何を聞きたいのだ」

「あなたは、力の源をどこにたくわえているの」

「なぜ、そんなことを知りたいんだ。それはだれにもいえないのだ」

「じゃあ、あなたは、わたしを愛していないのね」

お姫さまはそういつて涙を流しました。竜は、かわいそうになって、

「泣くんじゃない」といいました。

「だって、愛しているなら、教えてくれるはずですよ」と、お姫さまがいうと、竜は、

「だれにも知られないようにするなら、教えてやる」といいました。

「もちろん。だれにもいわないわ」

「じゃあ、教えよう。おれの森に銀のくまがすんでいる。くまは、昼になると、金の小川の水を飲みに来る。そのくまをだれかが撃って頭をふたつに割ると、中からいのししが跳び出す。そのいのししをだれかが撃って、頭をふたつに割ると、中からうさぎが跳び出す。そのうさぎをだれかが撃って、頭をふたつに割ると、中から箱が飛び出す。その箱をだれかがふたつの石で割ると、中にすずめばちが九匹いる。そのすずめばちが、おれの力の源だ。箱がこなごなになってすずめばちが殺されてしまうと、おれは蠅はえいっぴきほどの力もなくなってしまうのだ」

お姫さまは、竜にお酒をたっぷり飲ませました。そして、竜がぐっすり寝てしまうと、急いで部屋を出て、ヤーノシュを呼びました。

「ヤーノシュ、力の源がどこにあるかわかったわ」

お姫さまは、竜から聞いたことを残らずヤーノシュに話しました。ヤーノシュは、既に走って行って、小馬にいいました。

「竜の力の源が分かったよ。森に銀のくまがいて、昼になると、金の小川の水を飲み」

来る。そのくまをだれかが撃って頭をふたつに割ると、中からいのししが飛び出す。そのいのししをだれかが撃って、頭をふたつに割ると、中からうさが飛び出す。そのうさをだれかが撃って、頭をふたつに割ると、中から箱が飛び出す。その箱をだれかがふたつの石で割ると、中にすずめばちが九匹いる。そのすずめばちが、竜の力の源だ。箱がこなごなになってすずめばちが殺されてしまうと、竜は蠅いっぴきほどの力もなくなるそうなんだ」

子馬は、ヤーノシュにいいました。

「さあ、薪をひと山燃やして、その灰を納屋三軒分持って来てくれ」

ヤーノシュは、走って行って、薪を燃やし、納屋三軒分の灰を運んで来ました。子馬が灰をひとなめすると、たちまち子馬は立ち上がりました。残りの灰を全部なめると、小馬は、すばらしい金色の馬になりました。金の馬には足が五本ありました。

「ヤーノシュ、地下室に、金のくらと金の服と剣がかけてある。それを取って来て、わたしに金のくらを置き、あんたは金の服を着て剣を持って、わたしに乗るんだ」

ヤーノシュは、いわれたとおり、地下室に下りて行って、金の服を身に着け、くらと剣を持ってもどりました。

「さあ、出かけよう」

ヤーノシュは子馬に飛び乗りました。

森に着くと、ちょうど銀のくまが金の小川で水を飲んでいるところでした。くまは、ヤーノシュたちを見ると、うなり声を上げて向かってきました。子馬は五番目の足で、くまをけりました。くまは、ひっくり返りました。

「ヤーノシュ、勇気を出すんだ」と、小馬はいいました。

ヤーノシュは、くまに跳びかかって、剣で頭をふたつに割りました。すると、中からいのししが飛び出して、おそいかかって来ました。子馬が五番目の足でけると、いのししはひっくり返りました。ヤーノシュは、剣で頭をふたつに割りました。すると、中からうさが飛び出して、走り出しました。けれども小馬のほうが速く、ただちに追いついて五番目の足でけりました。うさもひっくり返りました。ヤーノシュは、剣で頭をふたつに割りました。すると、中から箱が飛び出して、飛び去ろうとしました。ヤーノシュは、大きな石をふたつ取り出して、箱をこなごなにくだいてしまいました。九匹のすずめばちはみな死んでしまいました。子馬は、

「もう恐れる物はない。竜の館にもどろう」といいました。

ヤーノシュと小馬がもどつてみると、竜が倒れていました。竜にはもう蠅いっぴきほどの力も残っていませんでした。ヤーノシュは、剣で二十四の頭を突いたので、竜は死んでしまいました。

ヤーノシュは、お姫さまといっしょに子馬の背に乘りました。竜の宝物もどつさり乗せました。子馬は、

「ホップ、ステップ、思いの所にいるだろう」とさけびました。そのとたん、ヤーノシュとお姫さまは、王さまの庭園に立っていました。

王さまは、悲しみのあまりすっかり弱っていましたが、お姫さまを見ると、大よろこびで迎えました。

ヤーノシュは、お姫さまと結婚して、やがてその国をつぎました。ふたりが死んでいなければ、今でも生きていることでしょう。

村上郁 再話

資料『オルトウタイハンガリー民話集』徳永康元ほか編訳／岩波書店